

色チョークによる水彩絵具を用いたアートパネル制作 — 美術館のための造形ワークショップ開発Ⅱ —

野村真弘* ・ 藤田英樹* ・ 小谷 充* ・ 上野小麻里**

Masahiro NOMURA ・ Hideki FUJITA ・ Mitsuru KOTANI ・ Saori UENO

Creation of art panel using watercolor paint with colored chalk.

— Development of Art Workshops for Museums II —

要 旨

本研究は島根大学教育学部美術科教育専攻と島根県立美術館との連携により「絵画素材を題材とした制作活動」を開発し、造形ワークショップの実践に基づいて、開発の過程で得られた知見や参加者支援の方法などを明らかにした。本ワークショップは、色チョークとアラビアゴムをそれぞれ顔料（色材）、展色材（バインダー）として使用、水彩絵具を自作し、描画する。その後、箔による擦り出し技法を用いて独自のアートパネルを制作し、成果物とするものである。ワークショップの全容を8部構成として定め、それぞれ開発の要点として課題と解決、支援方法の内容をまとめ、実践の状況をタイムラインによって示した。実践結果として、活動時間の問題、参加者の描写力、表現力の扱いに関する問題、材料についての問題、題材の主眼について取り上げ、本ワークショップの実践から得た知見に基づき、汎用性について言及した。

【キーワード：中学校美術科， 図画工作科， 絵画， 水彩絵具， 色チョーク， アラビアゴム， 箔， 擦り出し， 混色， 重色】

1 はじめに

1 研究経緯と目的

本研究は島根大学教育学部美術科教育専攻と島根県立美術館との連携による、造形ワークショップの実践に基づき、教材開発の過程や支援の方法など、実施に関する具体的な知見を明らかにするものである。

本学の美術科教育専攻は島根県立美術館と連携し、毎年造形ワークショップを開発、実践している。美術館の事業、教育普及活動について学習し、夏季中の企画展・コレクション展に関連する造形体験のワークショップを共同で企画することで、学生が教材の作成、参加者への指導・運営までの全行程を実践的に学習・実施することを目的としている。過去の実践例として、彩色石鹸を用いた造形活動の例をすでに第一稿としてまとめている。（※1）

本研究では続く第二稿として、令和4年度に実践した例をまとめる。本専攻と美術館との連携に基づき、本ワークショップは、大学教員、学芸員、附属学校教諭の指導のもと、美術科教育専攻3年生が試作品の作成や使用する道具の検討、支援方法や発話までを計画したうえで実践したものである。

2 対象ワークショップと開発の概要

島根県立美術館で開催されたコレクション展「しまびコレクション×夏の自由研究 なにに描こう なにに描こう」と関連し、描画材料である絵具に着目した「チョー

クで絵具！箔できらめくアートパネル」（令和4年8月11日～13日の各日2回、各回定員12名）の実践を取り上げる。参加者は一般参加者（小学3年生以下は保護者同伴）を対象として、島根県立美術館からの募集告知を経て決定した。1回2時間、計3日間で全6回の実施日程のうち、1回を島根・鳥取両県の現職教員研修として開催した。（※2）

① 題材の概要

島根県立美術館では、令和4年7月21日～8月29日の会期で「しまびコレクション×夏の自由研究 なにに描こう なにに描こう」が開催された。絵画はどのようにしてできているのかという問いかけのもと、キャンバスや木板に代表される支持体、水彩絵具等の描画材に着目し、絵画の物質性の観点から、成り立ちや表現の仕組みについて示した作品展である。各絵具の種類や組成を紹介した展示もされており、これに関連したワークショップを開発するにあたり、絵画の活動を中心に据え、特に材料に注目することとした。

絵具全般の構成要素である顔料（色材）と展色材（バインダー）を用意し、絵具そのものを自作する。顔料に油脂を加え、練り合わせることによって油絵具が得られ、顔料に水性の糊分を加えることによって水彩絵具が得られる。その際多少の添加物を加えることによって、絵具の伸び具合や艶の調整等が可能となる。特に水彩絵具は、展色材としてアラビアゴムが用いられ、安価であり、素材の調達も容易である。

* 島根大学学術研究院教育学系

** 島根県立美術館学芸課

② 制作物（成果物）の概要

顔料として色チョーク（※3）、展色材としてアラビアゴムを湯で溶いたものを練り合わせ、水彩絵具を自作する。次に、イラストレーションボード（※4）に自作した絵具を用いて、指で自由な描写を行う。さらに、描写した面に真鍮箔または銀箔を施すことで、偶然性を活かしたきらめきのある画面を生じさせる。絵具を乾燥させる時間を用いて額を作成し、額装したものを成果物とする。【図1】

色チョークを使用し絵具を作る活動は、平成26年に京都教育大学で行われた公開講座で工藤博幸による例（※5）があるが、先行研究としてまとめられたものは見られない。野角、楡金、島村、坂本（2024）による研究（※6）では、身近な土砂を用いた絵具の制作の例が挙げられ、同研究内でもその他素材を絵具として用いる例が報告されている。絵具を利用した活動として、顔料と展色材に着目した内容であることから、本研究と関連性がある。

③ 制作支援の概要

制作環境として、参加者を全3班のグループに分け、1班に一人の支援者（グループリーダー：以下GL）を置く。全体の進行と説明は総括者（メインスピーカー：以下MS）が行い、グループ毎の個別の指示や、細かい支援を各GLがそれぞれ行う。さらに、各回2名程度のサポーター（SP）を配置し、個別に指示された作業（用具の準備・片付け、照明の操作等）を担う。【図2】

制作活動は1、導入、2、顔料の制作、3、展色材の制作、4、水彩絵具の制作、5、練習、6、本制作、7、額の制作と額装、8、鑑賞の8部構成とした。一般的な絵画の活動では、描かれた図像（イメージ）や、描き方（描写力）や表現力に関する内容を扱うことが多い。ここでは材料そのものや、その扱いに注目した内容であることから、意図が十分に伝わるような支援を行う必要がある。具体的な図像の描画を考慮しないという点で、成果物は必然的に抽象的な絵画作品となる。第一稿としてまとめた彩色石鹼を用いた造形活動の例において指摘されたように、ここでの成果物は色彩による抽象的な絵画としての画面構成や、色彩の調和といった、絵画上の問題と無関係ではいられない。しかし、絵画上の問題に過度に注力すると、本ワークショップの意図と乖離する恐れがあることが課題であった。

上記課題の解決を図り、本ワークショップでは絵画という呼称をあえて避け、成果物はあくまでアートパネルという名称を用いている。そのうえで、発話内容にも「絵を描きましょう」といった、図像（イメージ）を描くことを連想させる言葉遣いを避けている。また、描画面に偶然性の効果を与えるため、真鍮箔・銀箔を用いて「擦り出し技法」を取り入れた。これにより、絵具を用いた描画は画面上の効果として残りつつ、箔によって偶然の模様が生み出されることとなる。参加者は描画によって作品を描きださなければならないという観念から離れ、自身の制作活動が積み重なった結果生じた、偶然の模様に対して想像を膨らませることとなり、上記課題に対して一定の解決を得ることとなった。

II 本ワークショップ開発の要点と支援方法

1. 導入

本ワークショップの導入は、絵画的な活動でありながら、描画によって図像（イメージ）を生み出すことが目的ではなく、絵具という素材や、扱い方に注目してもらうことが重要である。

島根県立美術館の所蔵作品のなかから、特に開催中のコレクション展展示作品のうちから小泉清の《にわとり》【図5】、《自画像》【図6】、西晴雲の《老松図》【図7】、を取り上げた。《にわとり》からは油絵具が主に顔料と油脂により構成されていることと、その特徴を示した。また、《老松図》は墨が主に煤と膠によるものであるということとその特徴を、最後に《自画像》により水彩絵具の構成とその特徴を示した。それぞれの例による共通点を示すことで、絵具は共通して顔料（色材）と展色材（バインダー）によって構成されていることが理解できる。【表1】

2. 顔料の制作

色チョークを適量に折り、木槌、乳鉢、乳棒を用いて砕く活動を行う。開発当初、赤・青・黄に、緑、白の中性色や無彩色も制作候補としていたが、制作時間が超過する懸念や、制作したものの実際の使用量を検討した結果、色の三原色を基準とした赤・青・黄に絞り、3色のチョークからそれぞれ赤色制作班、青色制作班、黄色制作班としてグループごとに色分けを担当して制作を行うこととした。

色チョークを砕く際には、破片が飛散する恐れがあることから、二重のジッパー袋にチョークを入れ、袋の上から木槌で叩き、破碎する。その後、乳鉢へ移し、乳棒で細かく粉碎した。【図8】粉碎の具合は、先に木槌で10回、声を揃えて叩く、乳鉢に移してから3分間すり潰す、というように回数、時間によって管理し、適宜GLが様子を伺うことで制作進度、具合を管理した。【図9】【表2-3】

3. 展色材の制作

粉末状のアラビアゴムを用意し、トレイ上で湯と混ぜ合わせる。展色材の伸びの良さを確保するため、添加剤としてグリセリンを用意した。参加者一人分の分量を検討し、アラビアゴム7g、湯15g、グリセリン1gと定め、事前にアラビアゴムを小分けにしておくことで素早く制作に移れるようにした。これらの材料を混ぜ合わせる際に、湯が冷めないうちに手早く混ぜ合わせることを意識づけ、「1分で混ぜる」、「グリセリンを加え、再び2分混ぜる」、と時間を定めた。【図11】【表4】

4. 水彩絵具の制作

トレイ上で作成した展色材の上から顔料を合わせ、ヘラで練りあげることで水彩絵具を制作する。練りあげる際に粉碎した顔料を均一に伸ばすため、顔料を合わせる際は一度に軽量スプーン山盛り1杯分と定め、繰り返すことで制作した。【図12】練り終えた水彩絵具はGLがトレイごと回収する。全3班の絵具制作が完了したのを

確認後、得られたそれぞれ赤・青・黄の絵具を水彩パレット上に適量ずつ盛り付けていく。【図14】[表4-5]

5. 練習（混色の指導）

三原色による減法混色の効果と、グラデーションによって得られる色彩の効果を共有し、実際に制作するにあたって技術指導を行う。それぞれの効果を試す機会として、練習用のイラストレーションボードを参加者に手渡し、混色と重色の仕方を試す機会を設けた。[表5-6]

はじめに、使用する3色のうち任意の2色を隣合わせになるよう描画面に乗せ、2色間の隙間を馴染ませるよう指示する。これは任意の色彩を画面上で直接混色する、画面上での混色である。次に、パレット上の絵具をそのままパレット上で混ぜ、得られた色彩を画面に塗る指示を行う。これは基本的なパレット上での混色である。【図13】最後に、画面上に重ね塗りをすることを指示し、どのような変化があるかを視覚的に体験することとした。上記の練習を終えた後、自由に塗り広げていく時間をとった。

6. 本制作

6-a. 絵具を使った活動

本番用のイラストレーションボードを配布し、練習での体験を活用しつつ自由に制作を行う。制作への集中力の具合から慎重に時間配分を検討し、最大で10分の制作時間とした。描く題材を定めるものではなく、パレット上の色を塗り広げていってみる、という観点によって発話が行われた。描画の仕方には、指の腹で塗り広げるだけでなく、爪でひっかく、塗った箇所をふき取ってみる等の効果も考えられた。参加者一人一人によって様々な描画の仕方があり、それらがどのような効果が生み出しているのかが見えるよう、他者の作品を見て回る時間を確保した。[表7]

6-b. 真鍮箔・銀箔を使った活動

箔についての説明の後、制作の工程を指示する。本来の箔貼りの工程は、素地の上から箔を慎重に被せ、押さえた後に余分な箔を払い落とすことによって行われる。本ワークショップでは、参加者の年齢や参加人数のこともあり、本来の箔貼りの工程通りに指示・実践を行うのは困難であった。そのため、専用の容器に箔の束を置き、容器内の箔へ作品をスタンプの要領で押し付けることによって箔貼りをを行う工夫を行った。【図21】

参加者が制作した作品を乾燥させ、作品の裏面に取っ手となるスチレンボードを貼り、作品の表面に薄く糊付けを指示する。参加者は糊付けされた作品を持って、会場に設置された箔貼り台へ移動し、上記の工程で箔を作品に貼り付ける。その後箔をウェットティッシュによって擦り出す工程を経るが、糊の乾燥時間の確保が必要なため、乾燥を待つ時間を用いて作品を額装するための木枠制作を行った。[表9-10]

7. 額の制作と額装

額となる木枠は、事前に作品の寸法に合わせ裁断したものを参加者人数分準備した。見栄えの観点からフロ-

ト額の形式を採用し、額の底面に黒色の厚紙を用いた。厚紙の四辺に木枠を貼り付け、完成した作品を厚紙の中央に張り付けることによって額装が完了する。制作時間の都合により、張り付けるための材料には両面テープを使用した。

額の制作には、正確に四辺、中央を定める必要があるが、参加者の年齢を考慮し、治具を用いて制作が進められるようにした。作成した治具は、用いる材料をL字に噛合わせることで正確な位置を定めることが可能とするものである。【図23,24】

8. 鑑賞

完成した作品を鑑賞用の机に移動させ、参加者全体で鑑賞を行う。その際二名ほど指名し、感想を伺う。鑑賞の観点として、①絵具の立体感、②モチーフ、模様（具体的な言及は避ける）、③混色した色の面白さ、④箔との組み合わせによる効果、⑤作品の特徴的な部分、と定めた。これらの観点は、事前に打ち合わせたものと合わせ、実践経験によって得られた観点も含まれ、都度適切な鑑賞と、作品に対する言及が行えるよう柔軟に対応された。[表11,12]

Ⅲ 本ワークショップの実践

本ワークショップはメインスピーカー（MS）とグループリーダー（GL）が相互に連携しつつ、制作、進行、時間配分や用具の管理を行いながら活動する。各回で担当する役割が変更されても常に同質の活動が行えるよう、発話の意図や制作の工程、時間配分等は複数回のリハーサルを経て定め、活動の進行表は厳密に作成した。第一稿の形式に倣い、進行表は文末のタイムライン全文と対応した図版をもって実践状況を示す。

Ⅳ 結果

本ワークショップの実践を通じて、以下の知見を得た。

1. 活動時間の問題

絵具を扱う活動では、時間配分に対する工夫が必要となる。本ワークショップのように、描いた絵に、さらに工程を重ねていくような活動の場合、描いた絵具の層が乾燥し終えないと次工程に移ることができない。絵具を塗る活動を終えた後、次工程の説明を挟み、さらに作品を飾るための額を制作することで、絵具の乾燥時間を確保するに至った。また、色チョークを砕き顔料を得る工程や、作成した展色材と顔料を混ぜ合わせ絵具を制作する工程等、どの程度砕くか、どの程度混ぜるかといった不文律のある工程を全て分単位の時間で管理した。作業時間は開発段階において実験を繰り返すことによって定められた。

2. 参加者の描写力、表現力の扱いに関する問題

描く活動あたって、参加者の描写力や表現力をどのように扱うのかという問題がある。制作支援の概要（I-2-③）でも述べたように、本ワークショップの本旨は絵画における材料やその扱いに対する理解を得ることである。そのため、本ワークショップの成果物は参加者一

一人の描写力や表現力に左右されないものとなる必要があった。図像（イメージ）に依らず、制作の練習段階から試し塗りを繰り返す指示を与えることで、混色の具合や重色の様子を注目させることとした。また、指で絵具を塗るのは、細やかな描画を行うには不向きであり、大味な描画となる傾向がある。ここでは、あえて大味な描画に徹することで、作品の部分や、細部に凝り固まらずに作業を進められる点が、本ワークショップの内容に適していた。

真鍮箔・銀箔を用いた擦り出し技法は、描いた画面に箔による偶然の模様を生じさせる。模様は乾燥した絵具に残る凹凸や糊付けの具合、擦り出す際の力加減によって生じ、模様をどのように生じさせるのかを完全にコントロールすることは出来ない。絵具の描画による様子と、箔による模様とで、意外な効果が画面上に現れることになる。この偶然性を参加者がどのように受け止めるか不安があったが、結果として、参加者は画面の具合や色合いから景色を連想したり、木肌のような風合いを感じ取ったりと、成果物から思い思いの観念を想像し、楽しむことができていた。これは、参加者自身の描写力や表現力によって直接描かれた図像（イメージ）から得たものではなく、偶然の模様が生み出した成果から得られたものである。参加者の描写力や表現力に左右されず、成果物から想像力を引き出す体験を与えられたことは本ワークショップの成果のひとつであるといえる。

3. 材料についての問題

色チョーク等、本来画材として想定されていないものを絵画の描画材として扱うにあたり、用意できる色数の不足や、市販の絵具と比較した際の鮮やかさにどうしても劣る等の問題があった。今回は色数をあえて三原色に基づいた色彩に絞り、混色や重色の学習を交えて使用することとした。これにより色数を必要最小限に抑えることができた。また、鮮やかさの具合については、市販品と比較して劣るには致し方ない面がある。しかし、あえて自作した絵具と市販の絵具とを見比べてみる等、同じ色味でもそれぞれの微細な風合いの違いや、品質の違いを感じ取るといった活動を想定することができる。

4. 題材の主眼

一般的に絵画を題材とした活動には、「何を」、「どのように描くか」という観点を主題にしているものが多くみられる。本ワークショップ題材の主眼として設定した、「何で」、「何に描くか」という観点は絵画を扱う題材に新たな展開をもたらすものであったといえる。今回、「何に描くか」という部分については、ひとつの題材に落とし込むには過剰な要素になり得たため、本ワークショップのうちでは扱わずに終えた。関連した題材として様々な支持体を用意し、描けるもの、描けないもの、支持体によって色の見え方が変わるもの等を扱った展開が期待できる。

「何で」描くかにあたっては、色チョークが学校現場

で身近な素材であるように、他様々な素材を絵画の描画素材として扱う可能性について広がりをもたらされる。展色材については、アラビアゴムを主成分とした接着材が一般に市販されているように、身近な素材であることに変わりない。市販の洗濯糊を代替して活用することも可能であることから、本題材は汎用性が見込めるものであるといえるだろう。

【謝辞】 本ワークショップの開発及び実施に際して、島根県立美術館の泉理恵子氏、島根大学学術研究院教育学系・川路澄人教授には多大なご助言・ご助力を頂いた。また、現職教員研修会に関連して島根大学附属義務教育学校の矢野美穂子教諭、江角哲弥教諭にご助力頂いた。最後に本ワークショップの企画・実施を担った島根大学教育学部 美術科教育専攻学生諸氏（太田雅、岡田祥明、角優那、錦織志乃、林琴美）へ感謝の意を表す。

【註】

(※1) 小谷充、藤田英樹、野村真弘、上野小麻里「減法混色及び色彩構成による彩色石鹸の制作活動：美術館のための造形ワークショップ開発Ⅰ」、『島根大学教育学部紀要』57号、2024年、pp.73-83

(※2) 一般参加者56名、教員参加者12名の計68名の参加者を得た。

(※3) 日本理化学工業株式会社、ダストレスチョーク

(※4) 株式会社オリオン、イラストボード（シリウス）、これを12cm×12cm×厚さ2.5mmに裁断したものを使用した。

(※5) 工藤博幸「未来を担う子どもたちに贈る理科実験教室 チョークから絵具を作ろう！化学の力で消えるインクも作ってみよう」、2014年7月5日、京都教育大学環境教育実践センター

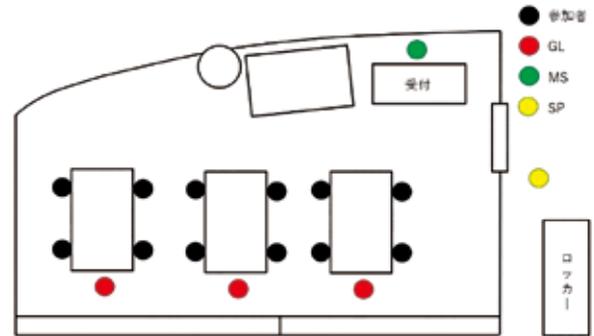
(※6) 野角孝一、楡金美乃、島村吏香、坂本淳子「絵具遊び活動－附属幼稚園の土砂を用いた制作－」、『高知大学学校教育研究』6号、2024年 pp.83-89



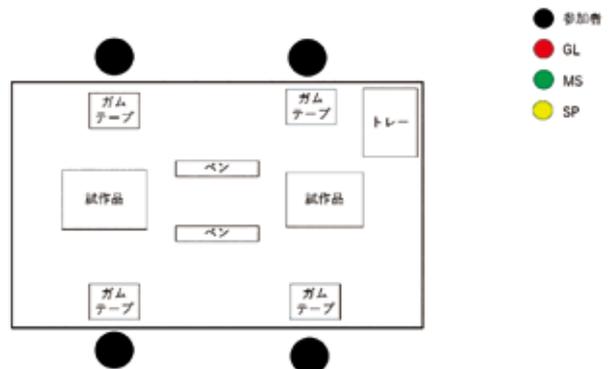
【図1】制作物（成果物）の作品

[表1] タイムライン1

<p>事前・メインスピーカー（以下MS）が参加者の名簿をチェック。参加者のグループを確認する</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定された席に着くように指示 「こんにちは。名前を教えてください。……〇〇さんですね。活動する机は〇（1、2、3）番です。あちらに座ってください（場所を示す）。」 グループリーダー（以下GL）が席に誘導する 参加者が配置された席に座っているかを確認 事前に机に1人分を切り分けて貼ったガムテープに名前を書くように指示 「こちらのガムテープに名前を書いて貼ってください。」 「これが今回、作るアートパネルです。ぜひ手に取ってみてください。金色か銀色の箔を貼るので、どちらが良いか考えておいてください。」 <p>0:00</p> <p>▼挨拶</p> <p>MS「皆さん、こちらを向いてください。時間になりましたので始めさせていただきます。本日は『チョークで絵具！箔できらめくアートパネル』にご参加いただきありがとうございます。本日メインスピーカーを担当します〇〇です。」</p> <p>GL「1班グループリーダーの〇〇です。」「2班グループリーダーの〇〇です。」「3班グループリーダーの〇〇です。」</p> <p>MS「このメンバーで皆さんの活動をサポートしていきます。よろしくお願いします。」「よろしくお願いします。」</p> <ul style="list-style-type: none"> GLはそれぞれの席に戻る カーテンを閉めて、電気を消す <p>1. 導入（絵の具の種類と特徴）</p> <p>MS「現在、島根県立美術館では「しまびコレクション×夏の自由研究」なかに描こうというコレクション展が開催されています。美術館に所蔵されている絵画作品を集め、使われている素材に注目した展示となっています。これから、そこに展示されている絵をいくつか紹介します。」</p> <p>▼スライドに《にわとり》を映す</p> <p>MS「このスライドを見てください。これは、小泉清の《にわとり》という作品です。よく見ると作品の表面がごつごつしていますね。どのような素材で描かれているのでしょうか。これは、油絵具という絵具で布に描かれています。油絵具は、土や石でできた色の粉と固まる性質をもつ油を混ぜ合わせてできています。」</p> <p>MS「油絵具には粘り気があります。それを厚く塗り重ねることで、絵具が盛り上がり、表面がごつごつとした絵にすることができます。チューブから直接絵具を絞ったそのままの形が画面の上で固まることにより、強い絵具の物質感が特徴的な作品となっています。」</p> <p>▼スライドに《老松図》を映す</p> <p>MS「これは西晴雲の《老松図》という作品です。先ほどの作品とは印象が全く違い、絵の表面はさらさらとしていますね。いったい、どのような素材で描かれているのでしょうか。この作品は、墨で紙に描かれています。墨は、物を燃やしたときに出てくる真っ黒な粉である煤と、膠というゼラチンを混ぜ合わせて作られています。」</p> <p>MS「墨は、水に溶けて紙の繊維に染み込むことで、黒一色でも濃い部分や薄い部分が見られます。また、水の量の違いによるぼかしや、かすれなどが使われた繊細な表現もその特徴です。」</p> <p>▼スライドに《自画像》を映す</p> <p>MS「これは小泉清の《自画像》という作品です。一枚目の油絵具を使った作品と同じ人が描いています。これもまた、先ほどの二作品と印象が違いますね。色鮮やかで、水に溶けたような絵具の表現がみられます。いったいどのような素材で描かれているのでしょうか。」</p> <p>MS「これは、皆さんも学校でよく使ったことのある水彩絵具で紙に描かれたものです。水彩絵具は土や石でできた色の粉とアラビアゴムという木の樹脂を混ぜ合わせてできています。」</p>
--



【図2】 会場配置



【図3】 各グループ卓上の初期配置図



【図4】 GL足元に設置したコンテナ内の配置図

他に道具回収用、箔の払い落し用の計3つのコンテナを設置している。

[表2] タイムライン2

この作品には、水彩絵具が水に溶けることによってできる透明感や、絵具の下から透ける色の重なり、水の量の違いによるじみなどの表現が見られます。」

MS「このように油絵具、墨、水彩絵具は何かと何かを混ぜあわせてできていることが分かりましたね。」

MS「作品紹介の中で説明した土や石、煤は色を持った粉です。そして固まる性質のある油、膠、アラビアゴムは、紙や布に色の粉をひっつけるのりの役割をしています。このように色の粉と接着剤とを混ぜ合わせることによって、絵具や墨などが作られています。今ではチューブから出すことで簡単に絵具を使うことができますが、昔の画家たちは自分でオリジナルの絵具を作っていました。」

MS「そして、今回は昔の画家たちと同じように水彩絵具を自分たちで作っていきます。今回作る水彩絵具は色の粉として、皆さんにも身近なチョークを使います。接着剤にはアラビアゴムという素材を使います。」

▼活動全体の説明（スライドを用いて説明）

MS「それでは、この後の流れについて一つずつ説明します。まず、色の粉を作ります。次に、接着剤を作ります。そして、チョークと接着剤とを混ぜて水彩絵具を作ります。」

MS「実際に作った水彩絵具で指を使ってアートパネルを塗ります。」

MS「その上から箔を貼ります。アートパネルの上に貼った箔を擦って削ります。」

MS「そして、作品を入れる枠を作って、完成です。」

最後に、完成した作品を鑑賞します。」

MS「今回の活動の完成作品はこちらです。紙の上に、今から作る水彩絵具で色を塗り、その上から箔が貼ってあります。」

MS「箔の隙間から下に塗った絵具が浮き出ている綺麗ですね。たくさんの工程がありますが、魅力のある世界に1つだけのアートパネルを作ることができるので、1つ1つ楽しんで制作を進めていきましょう。」

0:06

2. 顔料の制作

MS「では、色の粉と接着剤、水彩絵具を制作していきましょう。先ほども言った通り、今回は石や土の代わりに皆さんにも身近なチョークを使います。GLさん、お願いします。」

各グループにある試作品を回収し、鑑賞用の机の上にあるイーゼルに置いておく

- ・カーテンを開け、電気をつける
- ・チョーク、ジッパー袋、木槌・乳鉢・乳棒が入ったコンテナを机の上に出す

・3色のチョークから一班一色、担当させる

(1班が赤色、2班が青色、3班が黄色)

GL「では、制作を始めましょう。今回作る水彩絵具は赤、青、黄の3色です。各班で1色作り、後ほど全体で共有してアートパネルを作るときに使います。この班は、(赤色、青色、黄色)を作ります。では、大小1枚ずつのジッパー袋とチョークを机の真ん中にある入れ物からとってください。」

- ・2枚のジッパー袋とチョークをコンテナから、とってもらう

▼木槌での破碎

GL「では、チョークを手で半分折って小さい方のジッパー袋に入れてみましょう。小さいジッパー袋に入れたら、今度は大きな袋に入れて、袋を二重にしてください。2つの袋の口は、しっかり閉じておきましょう。」

- ・木槌をとってもらう
- ・チョークを砕き、乳鉢ですりつぶす方法の説明(乳鉢・乳棒、木槌の紹介)

GL「皆さん、チョークをジッパー袋に入れることができましたね。ここから、チョークをこの乳鉢と乳棒という道具を使って、細かく粉状にしていきます。」

- ・机の上のコンテナからGLの乳鉢・乳棒をとって、提示する



【図5】《にわとり》小泉清、油彩、キャンバス、1949年、鳥根県立美術館蔵



【図6】《自画像》小泉清、水彩、紙、制作年不詳、鳥根県立美術館蔵



【図7】《老松図》西晴雲、墨、紙、1916年、鳥根県立美術館蔵

[表3] タイムライン3

GL「先ほど皆さんにチョークを2つに折ってもらいましたが、このままでは乳鉢ですりつぶづらいので、まずはジッパーに入れたチョークをこの木槌で叩いて（木槌を提示する）、乳鉢ですりつぶせる程度に細くなるまで砕いていきます。チョークを木槌で叩く回数は、袋が破れてしまうを防ぐために10回程度とします。全員で一斉に叩いていくので少し待っててください。」

・全体を見て、準備ができたことを確認する

GL「今から、10数えるので一緒に叩いてみましょう。では、木槌を入れ物からとってください。（木槌をコンテナからとってもらう）せーの、1, 2, 3…10。」

・参加者の様子を見て、困っていることはないか確認する

▶チョークの粉がジッパー袋から出てしまう→セロハンテープかガムテープで破れた箇所をとめる

・木槌の回収（机の真ん中にある入れ物に置く）

GL「では、使い終わった木槌は回収します。机の真ん中にある入れ物に木槌を入れてください。」（GLも木槌を入れる）

▼乳鉢での粉碎

・乳鉢・乳棒をとってもらう

GL「皆さん、ある程度チョークを細かく砕くことができたようですね。では、これから乳鉢と乳棒を使ってチョークを細かくする方法を説明します。皆さん、見ていてください。」

GL「まずジッパーを開け、乳鉢に砕いたチョークを入れます。」

・GLはチョークの粉を乳鉢に入れる

GL「チョークを入れたら、小さい方のジッパー袋は、机の横のごみ袋に入れます。大きい方のジッパー袋は、入れ物に入れます。」

GL「このように乳棒を乳鉢に押し付けるようにチョークを砕いていきます。ある程度細かくなったら、くるくると回すようにチョークをすりつぶします。横の方に粉が溜まってきたら少し揺らして、底に集めるようにすると細かくしやすくなります。このくらいのさらさらとした粉になるまで、すりつぶしましょう。」

・見本のチョークの粉を提示する

GL「では、乳鉢・乳棒を入れ物からとってください。」

・乳鉢・乳棒をとってもらう

GL「それでは、チョークを乳鉢に入れるところまでやってみましょう。」

・参加者全員が入れ終わるのを待つ

GL「では、チョークをすりつぶしていきましょう。3分間、まずは頑張らしましょう。」

▶粉がこぼれてしまったときの対処

『こぼれてしまった粉はごみ袋の中に入れてください。』

▼顔料の完成

GL「あと、1分です。」

・GLがすり潰し具合を見て回りながら、声掛けを行う

GL「時間になったので手を止めてください。」

・GLがしっかり粉状になっているか確認する

▶まだ、制作時間が必要な場合

GL「もう少し、細かくすりつぶしてみましょう。」

GL「チョークを粉状にすりつぶすことはできましたか？」

・完成したチョークの粉は、入れ物の中に置いておく

GL「では、乳鉢と乳棒を机の真ん中にある入れ物に入れてください。」

MS「これで、色の粉が用意できましたね。では、次の活動に移ります。指の汚れが気になる場合は、布巾で拭いてください。」

・顔料の制作中にお湯を準備し、接着剤の制作の直前に各グループ1個ずつお湯の入ったカップを持っていく。

0:21-----

3. 展色材の制作

・白いトレイ、ヘラ、アラビアゴム（粉末）を人数分用意し、コンテナに事前に入れておく

▼アラビアゴムについての説明



【図8】 粉碎した色チョーク



【図9】 乳鉢、乳棒によって粉碎、指導の様子

[表4] タイムライン 4

MS「では、続いて接着剤を作ります。先ほども説明があった通り、水彩絵具の接着剤はアラビアゴムという素材でできています。
MS「今回、使うのはアラビアゴムの樹脂が粉になったものです。」
・粉末のアラビアゴムを提示する
MS「この、アラビアゴムの粉に水と植物性の油のグリセリンを入れて、接着剤を作ります。それでは制作で使う道具を渡すので、一緒にやっていきましょう。」

・白いトレー、ヘラ、アラビアゴム(粉末)を配る

▼水彩バインダーの制作

GL「まず、トレーの中から道具を出して右横に置いてください。」
・(SP) お湯の入ったカップにスプーンを入れて渡す。(GLにのみ)
・GLは説明しながら②まで一緒に制作する。

ジッパー袋に入っているアラビアゴム(粉末)7gを白いトレーに出す

GL「次に、アラビアゴムの粉が入った小さい袋から粉をトレーの真ん中に山になるように出してください。アラビアゴムが入っていた袋は机の横にあるゴミ袋に捨ててください。粉の山ができたなら、ヘラで凹みを作ります。」

・お湯が入ったコップから、お湯15gを計量スプーンで測り取り、小ペラで①と混ぜる

GL「これから、お湯とアラビアゴムを混ぜます。」

私がお湯をトレーに入れるので、真ん中にトレーを出してください。

・お湯を5人分トレーへ入れる

GL「このお湯はとても熱いので混ぜるときに火傷しないように気をつけてください。混ぜ方はこのようにヘラを寝かせ、すくって返し、押しつけながら引くという動作を繰り返します。(GLが先に実演)混ぜ方はわかりましたか。」

GL「それでは5分間やっていきましょう。」

・トレーを参加者に返す

GL「あと1分です。」

GL「時間になったので、手を止めてください。」

・約5分で行う。

・GLがグループ一人一人の混ぜり具合を確認

→固そうな場合、お湯を追加調整する。

MS「それでは、ある程度混ぜられたようなので、次の活動の説明をします。」

▼グリセリンを入れる

・グリセリンが入ったコップをSPが渡す

・GLが説明しながら実演

②コップに入ったグリセリンから計量スプーンで1g測り取り、小ペラで混ぜる

GL「次は、グリセリンを混ぜます。トレーを真ん中に出してください。」

・グリセリンを5人分のトレーへ入れる

GL「グリセリンを入れたら、先程のように混ぜます。2分ほど混ぜ合わせたら、接着剤の完成です。それでは2分間混ぜていきましょう。」

GL「あと1分です」

GL「時間になったので、手を止めてください。」

・お湯、グリセリンのコップ、スプーンをGLが回収して足元のコンテナに入れる

・(MS) グループの進捗状況を見て声をかける

GL「これで接着剤の完成です。それでは、次の活動に移ります。」

0:31

4. 水彩絵具の制作

①チョーク(顔料)と接着剤(水彩バインダー)をヘラで混ぜる

GL「では、色の粉と接着剤とを混ぜて、水彩絵具を作ります。まず私が作るのを皆さん見ててください。」

GL「まず、接着剤をトレーの真ん中に寄せます。真ん中にある乳鉢を取って、接着剤の上先ほどすり潰したチョークをスプーンで



【図10】 アラビアゴムの粉末

山盛り状にトレイに乗せ、中央にくぼみを作ることで湯の拡散を防ぐ。



【図11】 制作の様子と作成した展色材(バインダー)

展色材の役割を分かりやすく示すため、タイムライン上では接着剤と称している。

[表5] タイムライン5

山盛り1杯かけます。ヘラを使って、接着剤を作った時のように混ぜていきましょう。引き伸ばす動作をする際にトレーに広げてから集めていくと粉が混ざりやすくなります。」

GL「粉っぽさがなくなったら残りのチョークを2回に分けて入れていき、また粉っぽさがなくなるまで混ぜていきます。乳鉢とスプーンは回収するので、机の真ん中の入れ物に入れてください。混ぜる時間は7分取ります。では、やってみましょう。」

・7分で行う。

・(SP) GLが真ん中に集めた乳鉢・乳棒を回収

GL「あと1分です。」

GL「時間になったので、手を止めてください。」

・ヘラの使い方を教えやすくするために、GLも制作する（GLが制作してから参加者の制作に移る）

▼絵具の小分け

②完成した絵具を小分けにしていく

MS「時間になったので手を止めてください。これで水彩絵具ができました。作った絵具と使ったヘラ、トレーは回収します。〇〇さんから順番にトレーにヘラを載せて、私へ渡してください。」

・道具が入ったコンテナの回収（乳鉢・乳棒、スプーン）

・GLが別の机でパレットに3色均等に置いてグループ人数分配る

0:40

5. 練習

▼塗り方の指導1

・スライド資料を映す

・グラデーションやぼかしなどの方法を図や写真を用いながら説明する

・カーテンを閉めて、電気を消す

MS「皆さん、前を向いてください。もう一度、制作の流れを確認したいと思います。」

MS「まず、絵具を塗る練習をします。次に本番のパネルに塗ります。絵具を乾かし、のりをパネルに塗り、箔を貼ります。箔ののりを乾かしている間に飾るための枠を作っていきます。箔ののりが乾いたら、箔を削って下にある色を出し、枠に貼り付けて完成です。」

▼混色の指導

・スライドに合わせてゆっくり読む

MS「次に、色と色を混ぜて新しい色を作る方法について説明します。」

MS「まず、色について説明します。色には三原色と呼ばれる色があり、今回皆さんに作ってもらった赤色、青色、黄色が三原色です。赤色、青色、黄色と白色以外のすべての色は、三原色を混ぜることで作ることができます。」

MS「では、三原色を混ぜることでどんな色を作ることができるでしょうか。例えば、赤色と黄色を混ぜることでだいたい色を作ることができます。また、混ぜる絵具の量を変えることで、同じだいたい色でも変化が見られます。赤色の絵具の量を黄色の絵具の量よりも多くすることで赤みのだいたい色になり、黄色の絵具の量を赤色の絵具の量よりも多くすることで黄みのだいたい色を作ることができます。」

MS「黄色と青色では、緑色を作ることができます。だいたい色の時と同じ様に、絵具の混ぜる量によって、黄緑色ができたり、青緑色ができたりします。」

MS「赤色と青色では、紫色を作ることができます。紫色もだいたい色や緑色と同じ様に、混ぜる絵具の量によって、赤紫色ができたり、青紫色ができたりします。」

MS「このように二つの色を混ぜることでたくさん色を作ることができます。」

▼グラデーションの指導

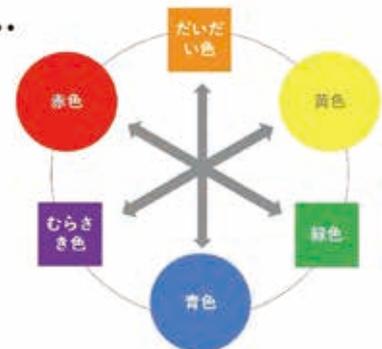
MS「色を混ぜていくと、色にだんだん変化が付く部分が出てきます。左の写真は上が赤色ですが、真ん中のところはだんだんとだいたい色になり、黄色に近づいていきます。このような色の移り変わりを



【図12】制作の様子と作成した水彩絵具



反対色とは…



【図13】スライドによる混色、グラデーション、反対色についての指導

[表6] タイムライン 6

グラデーションと言います。」

▼各色の反対色の説明

MS「また、この図は先ほど紹介した混ぜ色の関係を円状に表したものです。この図で反対側になっている色同士のことを、補色や反対色と言います。例えばだいたい色と青色、赤色と緑色、黄色と紫色という組み合わせです。反対の色同士を混ぜると暗い茶色ができます。このように暗い色合いを出してみたい人は、ぜひ実験してみてください。」

▼塗り方の指導 2

MS「続いて、絵具の塗り方を紹介します。まず水彩絵具を指でとりまします。絵具をパネルに置き、厚みがなくなるまで薄く塗り広げます。これを繰り返して、色を重ねていきます。この塗り方をすることで、水彩絵具の特徴である、色の重なりを指で簡単に作ることができます。」

- ・カーテンを開けて、電気をつける

MS「以上で、色の塗り方の説明を終わります。では、今から各グループにパネルを配っていきます。サポーターさんよろしくお願ひします。」

- ・(SP)各テーブルに2枚組のパネルとペン入れを配る(コンテナごと机に置き、参加者にとってもらう)

GL「ペンを入れ物の中からとってください。机に置かれているペンで、今配られた配られたパネルの裏側の下のの方に名前を書いてください。」

GL(全員が名前を書き終えたら)「2枚とも書き終わったら、1枚を机の真ん中において、今スライドに映しているような状態にしてください。パネルの輪ゴムは、ペン入れにいられておいてください。」

▼練習の準備

GL「それでは、実際にパネルに色を塗っていきます。まず1枚目で練習してみましょう。グループリーダーさんお願いします。」

GL「では、先ほど作った絵具が入ったパレットを配ります。」

- ・絵具を取り分けけたパレットを配る
- ・混ぜ色でパネルを塗っていく(GLも一緒に行う)

GL「では、実際に練習をしていきましょう。今回は指を使って絵具を塗りますが、どうしても手がかぶれたり、汚れたりすることが気になる人は、手袋を用意しているので私に教えてください。」

GL「練習していくやり方は、パネルの上で色を混ぜる方法と、パレットで色を混ぜる方法と、重ね塗りの練習です。色を混ぜる練習の方では2色を使って、重ね塗りの方でつかって使っていない3色目を使います。皆さん、絵具を塗る準備はできましたか。」

▼画面混色の練習

GL「では、はじめにパネルの上で色を混ぜる練習をしていきましょう。3色のうち好きな色を2色選んで隣り合うように載せます。載せたら2色をぐるぐるとなじませます。では、ここまでやってみましょう。色が変わっていききましたね。このようにすることで、新しく色を作ったりすることや、隣り合っている部分だけを混ぜることで色と色を馴染ませたりすることができます。」

▼パレット上での混ぜ色練習

GL「次に、今使った2色をパレットで混ぜて塗る練習をしていきましょう。混ぜて色ができたらパネルに塗っていきましょう。パレットであらかじめ混ぜることで、画面に均一な色を塗ることができたり、発色のよい色を塗ったりすることができます。パレットに作る時は、予め多めに作っておくと絵の具が乾いた時や色が足りなくなった時にもう一度同じ色を作り直さなくて良くなります。色を作る時の参考にして下さい。」

GL「それでは、次の練習に入る前に指の汚れが気になる人はタオルで拭いてください。」

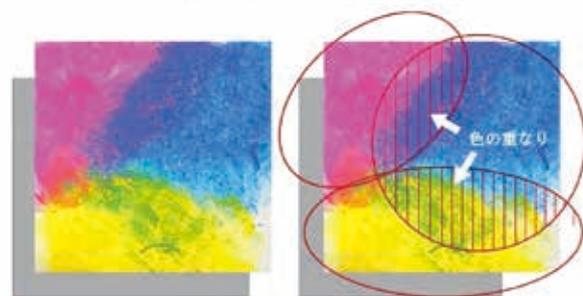
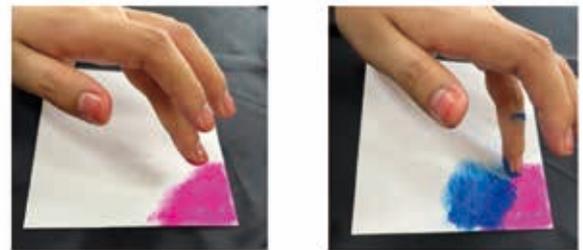
- ・パレットでの混ぜ色で、多めに作っておくように指示する(乾燥防止や色不足防止のため)

▼重色の練習

GL「では、最後に重ね塗りの練習をしていきます。先ほど、色を



【図14】作成した水彩絵具を小分けする作業と小分けされた水彩絵具。MSによる塗り方の全体説明の最中にGL、SPによりパレットへ小分けする。



【図15】「画面混色の練習」の図

[表7] タイムライン7

混ぜる練習で使わなかった色で重ねて塗りをしていきましょう。色を混ぜ合わせたときは違う効果が出てきたと思います。」
GL「それでは、時間がくるまで全体に同じ色を塗り広げていきましょう。」

▼練習制作

GL「では、今から3分間時間を取ります。制作を始めてください。」

GL「制作時間は残り1分です。」

GL「時間が来たので、手を止めてください。」

▶絵具に水を加えたいと言われたら…

GL「水を加えてしまうとアートパネルが水を吸って曲がってしまうので、今回は水無しでがんばってみましょう。」

・(MS)各グループを見て回り、鑑賞で話を聞く人に目星をつけて、コメントを考えておく

GL「これで練習用のパネルの制作を終わります。練習用のパネルは、机の上に置いておきましょう。」

GL「指を水場で洗ってきてください。」

・(GL)練習用のパネルに対してポジティブな声掛けをする

『この模様がきれいにできているね。(大きな模様の場合)』

『〇色と〇色を混ぜたのかな。色の組み合わせが素敵だね。』

『この色は下に〇色を塗ってから〇色を塗ったんだね。下の色が上の色と混ざって面白い色になっているね。』

MS「では、練習用をもとに本番を制作してみましょう。」

0:51-----

6-a. 本制作 (絵具を塗る活動)

GL「では、本番用のパネルに色をのせましょう。制作時間は10分間取ります。練習の時を思い出しながら塗り始めてください。」

▶(GL)本番用のパネルになかなか塗り進められない参加者に対して声掛けを行う。

『どの色を使って塗りたいですか?』

『単色で塗ってもいいし、3色使ってみてもいいですよ。』

GL「制作時間は残り1分です。」

GL「時間になったので、これで制作を終わります。できた人は本番用パネルを銀トレーに入れてください。トレーにパネルをのせた人から、一度手を布巾でふいてください。布巾でも汚れが落ちない時は水場で手を洗ってください。」

・GLが歩き回る指示

GL「こうして自分の班の人の色の塗り方を見比べてみただけでも、まったく違うものが出来上がっていますね。きっと、他のグループも様々な色の塗り方をしていると思います。そこで、今から部屋の中を自由に見て回りましょう。」

・部屋を歩き回る

・参加者が歩き回っている間にGLが絵具のパレットを回収する(もう使えないパレットは水につけておく)

・席に着く

・MSが最後のグループが歩き回り始めてから1分測る

MS「それでは、時間になりましたので座ってください。」

GL「どうでしたか。同じ3色を使っているけれど、いろいろな塗り方がありましたね。」

GL「この後、これからの活動で使っていく箔についての説明を全体でします。説明が始まるまで少し待っていてください。そして、説明が終わった後、パネルに箔を貼ります。金色の箔にするか銀色の箔にするか考えておいてください。」

・(SP)本番用のパネルが入ったトレーを回収する

6-b. 本制作 (真鍮箔・銀箔を使った活動)

・MSが説明をしている間にGL、SPは作品の表面を乾燥させる。

・(MS)箔プースの準備(のり、箔の準備の確認等)

・(GL)自分の班の分の木枠のセットをもっていく

・カーテンを閉めて、電気を消す

▼箔の説明

MS「それでは箔について説明します。」



【図16】 絵具を塗る練習の様子



【図17】 本制作の様子と、作成された画面の様子

[表8] タイムライン 8

MS「会場にいられた際に、皆さんには試作品を見てもらいました。それには今塗った水彩絵具だけではなく、表面に薄くキラキラとしたものが付いていました。皆さんは絵の具を塗った上から貼るこの薄くキラキラしたのを知っていますか。」

MS「これは箔といいます。金属を薄くなるまで伸ばして作られています。銀色の金属をのばすと銀箔、金色の金属をのばすと金色の箔が出来上がります。本来、美術作品などに使用する純金を使った箔の金箔はたいへん高価なので、今回は真鍮という金属の箔を使います。この真鍮という金属は皆さんが知っている五円玉にも使われています。」

MS「箔は、約1500年前に日本に作り方が伝わり仏像を中心に使われるようになりました。日本の有名な仏像も、作られたばかりの頃は全身がキラキラしていたと言われています。その後、仏教に関する美術品に使われるようになりました。また、作品を華やかにしたり豪華にしたりするために、絵の中にも箔が使われるようになりました。箔は、表面に独特の光沢あり、高級感や特別感を見る人に感じさせます。」

▼箔の効果の説明

MS「これが先ほど作ったアートパネルをイメージした図です。アートパネルの状態は層が薄く重なっている状態です。水彩絵具を重ねてできた色の層が重なり、下の色が透けて偶然にできた様々な色や形になりましたね。」

MS「そしてこの後、その上からさらに箔の層が重なっています。箔を削って面白い形ができたその下から、水彩絵具が見えます。見えるところと見えないところがあるので、美しい見た目になります。このようにして今回の作品は、薄く層を重ねていくことで作られています。」

・箔の効果の説明

MS「箔を効果的に絵画に取り入れる方法はたくさん考えられてきました。描きたいものの雰囲気に合わせて箔を加工して、効果的に作品に取り入れます。」

MS「今回は、偶然の削り跡が美しい形になる擦り出しという技法を使って、箔を作品に取り入れます。こすり跡がとてもきれいで、偶然できる箔と下の色との色合いが手で描こうとしても描けない美しさを出すことができます。」

▼準備

- ・カーテンを開けて、電気をつける

MS「それでは、箔を貼るところからやっていきたいと思います。グループリーダーさんお願いします。」

- ・スチレンボードを貼る(本番のパネルのみ)

GL「それでは、今から箔を貼る準備をしていきます。」

GL「まず、本番用のパネルが帰ってきたので、自分のものを手元に置いてください。」

- ・スチレンボードを足元のコンテナから取り出し配る

GL「今から、小さい板を1枚ずつ配ります。では、箔を貼る本番用のパネルを用意してください。」

GL「小さい板を、本番用パネルの後ろの真ん中あたりに貼り付けます。①と描かれている面の両面テープだけ剥がして貼り付けてください。両面テープのごみは、横のごみ袋に捨ててください。」

▼箔の糊付け

- ・箔をはる場所まで移動する。
- ・班ごとに移動し、箔を貼る

GL「では、あちらのテーブルで箔をはります。今から移動しますので、本番用のパネルを持ってきてください。」

- ・箔のコーナーの前に集まる

- ・絵皿にのりを入れておく (GL,MS 手が空いている人)

GL「箔は吸い込むと危険なので、必ず鼻の位置までマスクをつけてください。」

- ・(GL,SP) 金と銀それぞれの箔のはり方を説明しながら実演する。

GL「では、今から箔をはっていきます。まず、私が箔の貼り方を



こすりだし

こする前

こすった後



【図18】 スライドによる「箔の効果の説明」の様子

箔なし

箔あり



箔をはってこすりだすことで、偶然できる美しさがある！

【図19】 擦り出しによって得られる作例の図



【図20】 箔貼り台に設置されたコンテナの配置図

左コンテナ内から、箔の台紙をはがすためのピンセット、貼った箔を押さえるための綿、箔。右コンテナ内に、余分な箔を扱うための刷毛、新聞紙によって囲いを敷いている。

[表9] タイムライン9

説明するので見ていてください。」

GL「まず、のりをパネルに塗ります。刷毛にのりをよく染み込ませた後に、容器の端を使って表裏を1回ずつこそぎ落してから、表面を優しく滑らせるように塗りましょう。同じところに二度塗ると、乾かした絵具が滲んでしまうので、気を付けてください。のりを塗り終わったら、自分が選んだ箔が入っている箱の前に行きます。こちらが金色の箔でこちらが銀色の箔です。」

GL「これから箔をはっていきますが、見えにくい人は近くに来て見ても大丈夫です。箱には箔が重ねて置いてあります。前の活動でパネルに貼った小さい板を持って、スタンプのように優しく押して箔を貼ります。この時、このように（箔を貼ったパネルを見せる）箔の大きさがパネルと同じぐらいなのでズレないように気をつけてください。」

GL「このままでは箔とパネルの間に隙間ができてしまい、うまく乾かないので隙間を無くすために、箔を綿でパネルにしっかりと押し付けます。」

GL「はったら、箔をパネルの側面に折り、余分な箔を箱に入っている筆で落としてください。落とす終わったら、筆はコンテナの中に戻してください。箔をはったアートパネルは、各班にあるトレーに入れます。わからないことがあれば聞いてください。」

・(SP)GLの本番用パネルを乾かしに行く

・(SP)箔を貼る場所にて、参加者の補助をする

GL「金箔の人はこちらに並んで、銀箔の人はこちらに並んでください。では、順番にやっていきましょう。(次の人に指示を出す)では、次に〇〇さん箔をはっていきます。」

▶のりを塗るときに筆の毛が入ってしまう

『少し見せてください。』

・(GL)毛をピンセットで取り除く

・(GL)箔を貼るサポートをする

・箔を貼った作品は、グループごとにトレーにのせて乾燥させる(トレーにはガムテープを貼っておく)

GL「箔が貼れた人は真ん中のトレーにパネルを入れてください。机の上が汚れていたら布巾で拭いてください。」

・(SP)パネルを入れたトレーを回収する

1:24-----

7. 額の制作と額装

・各グループに枠のセットと参考作品を持っていく

GL「それでは箔ののりを乾かしている間に枠を作っていくと思えます。」

▼額の制作

・道具を配る

GL「L字のガイドと2本組になっている木の束を2つ、大きい台の上にのせた状態で配ります。台にセットされているL字のガイドは動かさないでください。台の下側に出っ張りがあるので、これを机に引っ掛けるように置いてください。では配ります。」

・GLが説明しながら実演

①1本目、2本目の木枠を付ける

・GLが出来上がった木枠を持ちながら説明をする

GL「これから2本ずつの木枠を貼り付けて、このような木枠を作っていきます。やり方を説明するので見ていてください。」

GL「まずこの2本を組み立てていきます。まず片方の小さい両面テープをはがします。この面を、もう1本の木枠の何も無い面に貼り付けます。これを、直角になるように貼り付けるので、台にセットされているL字ガイドに沿わせて組み立てます。」

GL「これで、1つの角ができました。では、今説明したやり方で1組組み立てていきましょう。組み立てることができたら手を止めてください。」

▶困っている参加者がいたら声掛けを行う

②同様に3本目、4本目の木枠を付ける

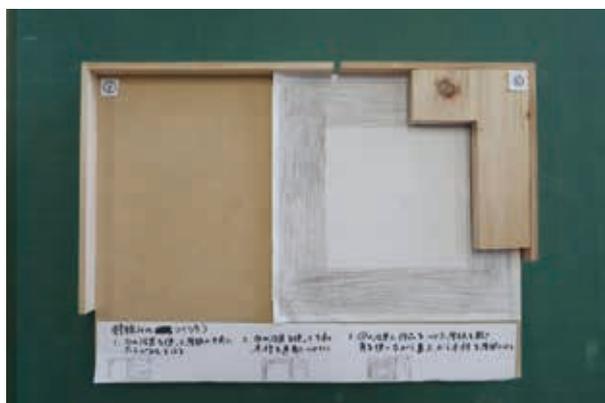
GL「角を1つ作ることができましたね。同じ方法で木枠を



【図21】箔貼りの様子。容器内の箔へ作品を、スタンプの要領で押し付けることによって箔貼りを行う。



【図22】貼り付けられた箔の様子



【図23】「額の制作」にあたり配布された治具・ガイドの様子

[表 10] タイムライン 10

もう2本つけてみましょう。』

③2本ずつ組み立てた木枠を付ける

GL「2本の木を組み立てたものが2つできたと思います。」

GL「では、今からこの2つを組み立てて、このような四角い枠にしていきたいと思います。やり方を説明するので、見ていてください。」

GL「まず、それぞれの角に小さい両面テープが残っていると思います。この両面テープを2つとも剥がします。剥がした両面テープの面をもう1つの角の何も無い面に貼り付けます。この時、L字のガイドを使って角が直角になるように貼り付けていきます。そうすると、見本のように四角い枠ができます。では、皆さん組み立てていきましょう。」

▶枠づくりが上手にいかない人には丁寧に対応する

『できあがった枠をよく見てみましょう。』

『木枠を貼る時はしっかり台に置いてやってみましょう』

GL「組み立てることができました。これで枠づくりは終わりです。」

GL「枠が完成した人は、一旦枠とL字のガイドを台の前に置いて、ごみを机のごみ袋にすてましょう。木をとめていた輪ゴムは回収します。机の入れ物にいれてください。」

・目の前に参考作品を置いておく

・箔を貼るのに使った道具を洗う

▼擦り出し

・乾燥したアートパネルを裏面の名前を基に配る。

・ウェットティッシュを足元のコンテナから取り出しておく。

・箔の落とし方のパターンを紹介する

GL「箔のりが乾きました。これから実際に箔を擦る擦り出しという方法で、最後の仕上げをします。」

・実際にGL（全員）が擦りだしを実演する。

GL「では実際に私がやってみるのでよく見ていてください。」

GL「擦りだしは、このようにウェットティッシュを画面に擦って箔を落としていきます。」

GL「見てください。画面の左下の部分の箔を落とすと下の〇〇色が見えてきました。また、この辺に沿って箔を落とすと△△色が見えてきました。」

・作品が届いていなければ参考作品の効果の説明をする

GL「この色の見え方は、下の塗り方によるので人それぞれです。画面を色んなやり方でこすってみて下の色を出してみましょう。」

・作品に戻ってきたらウェットティッシュを一人一枚配る。

GL「みなさん擦りだしのやり方はイメージできましたか。質問があればいつでも言ってください。」

GL「それではウェットティッシュを使って、画面の上を優しく擦りましょう。制作時間は3分です。始めてください。」

MS「あと1分です」

MS「時間が来たので、手をとめてください。最後に木枠を付けて、作品を完成させましょう。」

▶こすり出しをした際に色が飛んだ時の声掛け

『色がかすれている感じがして模様新しい表現が生まれているね。その周囲を擦り広げてみてもいいと思うよ。』

▶なかなかこすれない人への指導

『まずは大きい〇や△を描くイメージでウェットティッシュを使ってみよう。その形に沿って小さい形を擦ってみよう。』

・(MS) 擦り出しの段階で鑑賞時にコメントを求める人に目星をつけておき、言うことを決めておく

MS「〇〇さんの作品は、この部分がすごいね。どのような工夫しましたか。」

MS「では、後の鑑賞のときに皆さんの前でこのことを発表してもらっても良いですか？しっかり、フォローをするのでよろしくお願います。」

▼作品完成と類装

・机の上を整理する。

GL「こすり出しで使ったウェットティッシュをゴミ袋にすて



【図 24】「額の制作」の様子。治具にガイドをあて、木枠を添わして張り付けることで正確な直角が得られる。



【図 25】擦り出しの様子と得られた画面の図。ウェットティッシュを用いて擦り出し技法を行う。

[表 11] タイムライン 11

ましよう。」

▼作品完成と額装

・厚紙と型枠を配布する。

GL「それでは、新たに黒い厚紙と型枠を配ります。」

・グループごとで実演しながら、具体的に説明する。

①アートパネルに厚紙を貼りつける。

GL「それでは、最後にアートパネルと黒い厚紙と枠を付けて完成させたいと思います。木枠の時のように、私が最初にやり方を説明するので、見ていてください。」

GL「まず、アートパネルと厚紙を付けます。台の型に合わせて厚紙をおきます。」

GL「次に、L字のガイドを厚紙の上から台の型に合わせておきます。」

GL「アートパネルの裏の小さい板の両面テープを剥がし、L字のガイドに沿って、厚紙に張ります。ここまで、まずやってみましょう。」

②アートパネルに木枠を貼り付ける。

GL「次は、枠と厚紙を付けます。私がやり方を説明するので見ていてください。」

GL「まずアートパネルにつけた厚紙をこの大きい型枠に合わせて置きます。」

GL「次に、先程作った木枠の裏の両面テープを剥がします。」

GL「厚紙の真上に木枠がくるように、両面テープの面を下にし、型枠に合わせてゆっくり貼り付けます。貼り付けることができたなら、型枠を木枠から外します。」

GL「すると、作品が完成します。貼り方は、わかりましたか。」

GL「では、作品を完成させるところまでやってみましょう。」

▶型枠に木枠がはまらない時の声掛け

『木枠を回して別の辺を上にしてはめてみよう。』

GL「これで作品の完成です。」

1:44

8. 鑑賞

・台とガイドと型枠を回収する。

GL「これから鑑賞を行います、その前に机の上をきれいにします。

作品は一旦、台の前に置いてください。」

GL「作業で出たごみは袋に捨ててください。大きい台とL字のガイドと型枠を回収します。〇〇さんから順番に私に渡してください。」

・(SP) イーゼルから試作品をとる

・鑑賞用の机の上にイーゼルを並べる。

MS「作品の鑑賞をみなさんの後ろの机で行うので、そこに自分の作品を置いてください。置いたら机の周りに集まってください。」

・全体で鑑賞を行うよう指示。

MS「どの作品もとても魅力的ですね。せっかくなので、2人ほどに作った感想を聞いてみましょう。では、〇〇さんから聞いてみようと思います。」

・鑑賞で感想を言ってもらう人を2人指名

子どもたちが作ったものの良いところを気づけるように作品の良さを伝える(自分たちの言葉で)

目星の付け方

①絵具の立体感

②モチーフ、模様(鑑賞のときに具体的には言及しない)

③混色した色の面白さ

④箔との組み合わせによる効果

⑤作品の特徴的な部分

・質問は1人に対して1つか2つ

【発話例】

・MS「Aさんの作品はどれですか。」

・MS「作品で頑張ったところはどこですか?」

・MS「作品で気に入っているところはどこですか?」

→「色のグラデーションがとても綺麗で、魅力的な作品になっていると思います。」

→「とても素敵な作品になりましたね。お家の人に見せてあげて



【図 26】額装の様子。再び治具とガイドを用いることで作品を正確に厚紙の中央に張り付ける。



【図 27】額装の完成図。事前に作成した四方の木枠を厚紙に合わせて貼ることで額装が完成する。



【図 28】額装の様子

[表 12] タイムライン 12

<p>くださいね。」 →「とても綺麗な作品になったのでぜひ飾ってください。」 「Aさん、ありがとうございました。」 ・拍手 MS「皆さん、本当に素敵な作品ができましたね。発表してくれた二人ともありがとうございました。」 ・拍手</p> <p>1:51-----</p> <p>▼まとめ MS「本日のワークショップは、いかがでしたでしょうか？現在、鳥根県立美術館では「しまびコレクション × 夏の自由研究 なにぞ描こうなにに描こう」というコレクション展が開催されています。その中には、ワークショップのはじめに紹介した作品もあります。このコレクション展は、中学生以下無料だそうですので、この後、是非見に行ってみてくださいね。」 MS「今日作ったアートパネルは、持ち帰り用の袋を各グループの机でGLがお渡しします。木枠がとても壊れやすいので、優しく持って帰ってください。」 MS「これで、『チョークで絵具！箔できらめくアートパネル』の活動を終わります。本日はご参加いただき、ありがとうございました。」 「ありがとうございました。」(拍手) ・(GL) グループの机で持ち帰り用の袋を手渡す ・参加者に入れさせる。</p>
--



【図 29】 完成した作品と作品展示の様子



【図 30】 「鑑賞」とまとめの様子